BankART Over 35

2023.7.6 thu－23 sun 11:00～19:00

BankART KAIKO 横浜市中区北仲通5-57-2 KITANAKA BRICK & WHITE 1F

休館日：7月10日［月］、18日［火］　※7月7日［金］、8日［土］のみ夜間オープン11:00～21:00　オープニングパーティー：7月6日［木］19:00～21:30
入場料：500円（カタログ2冊付、U35、O35の2会場ともに再入場可能なパスポート制）、中学生以下、及び障がい者手帳をお持ちの方と付き添い1名は無料
主催：BankART1929　共催：横浜市にぎわいスポーツ文化局

←ナガ
←
←
オボコ→スバシリ→

2023.7.6 thu－23 sun 11:00～19:00

BankART Station 横浜市西区みなとみらい5-1「新高島駅」地下1F

休館日：7月10日［月］、18日［火］　※7月7日［金］、8日［土］のみ夜間オープン11:00～21:00　オープニングパーティー：7月6日［木］19:00～21:30
入場料：500円（カタログ2冊付、U35、O35の2会場ともに再入場可能なパスポート制）、中学生以下、及び障がい者手帳をお持ちの方と付き添い1名は無料
主催：BankART1929　共催：横浜市にぎわいスポーツ文化局

BankART Under 35

BankART Under 35 / Over 35 2023

「BankART Under 35」は、35歳以下のアーティストによる個展シリーズで、これまで52チームを紹介してきました。今回は「Under 35」に併せて、35歳以上の作家による「Over 35」も同時期に開催します。作家は、公募で5名の審査員（川俣 正、村田 真、木村絵理子、吉田有里、細淵太麻紀）によって選出されました。今回は、作家＋マネージャーのジョイントチームによる、「Under 35」3組がBankART Stationで、「Over 35」2組がBankART KAIKOで、同時に展覧会を開催します。みなさまのご来場をお待ちしております。

会期｜2023年7月6日［木］〜23日［日］（休館日:7月10日［月］、18日［火］）
時間｜ 11:00〜19:00（7月7日［金］、8日［土］のみ夜間オープン11:00〜21:00）
会場｜BankART Station（Under 35）、BankART KAIKO（Over 35）
入場料｜500円（カタログ2冊付、U35、O35の2会場ともに再入場可能なパスポート制）
中学生以下、及び障がい者手帳をお持ちの方と付き添い1名は無料
オープニングパーティー｜7月6日［木］19:00〜21:30

本展覧会に併せて、各作家の個人カタログを刊行、販売いたします。
1冊200円［税込］
A4変形判 /24ページ（予定）

Over 35
BankART KAIKO

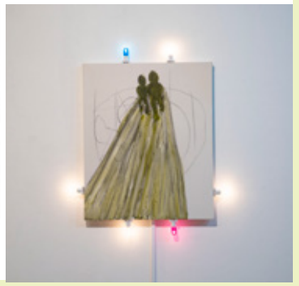
蓮沼昌宏　マネージャー：蓮沼菜穂子

アーティストのためのケアや解きほぐしが内容のワークショップと、自分たちの必要からつくる子どもの遊び場と授乳室。それと走馬灯をテーマにした作品。これらを軸に展覧会をつくります。走馬灯は今際の際にみるといわれますが、どんなシーンでどんなコンセプトで再生されるのでしょう。育児と制作の間でへんな状態になるとき、あ、ここは走馬灯で使われるかもしれない、と思うことがあります。仮の走馬灯を育てていくような展示を目指します。

蓮沼昌宏｜美術家。1981年東京生まれ。2010年東京藝術大学大学院美術研究科博士課程修了（美術解剖学）。絵画や写真、手回しの動画装置のキノーラが主な表現方法。近年の活動に2023年「ソーラー、象、パネルの絵」（gallery N 神田社宅、2023）、「特別的にできない、ファンタジー」（神戸アートビレッジセンター、202）、「物語の、準備に、備える。」（富山県美術館、2020）がある。長野を拠点に活動中。

蓮沼菜穂子｜東京藝術大学美術学部芸術学科卒業、同大学院美術解剖学修士課程修了。大学在学中より衣裳デザイナーとして活動。その後、ギャラリーの立ち上げ（RISE GALLERY、東京）、展示企画・運営などの仕事に従事する。越後妻有トリエンナーレ2015から蓮沼昌宏の制作アシスタント／マネジメントを担当。ワークショップの企画・運営にも携わるようになる。

Photo: Ryohei Yanagihara



島島（アイランズ）（Islands）/ 梁 志和・劉 時棟

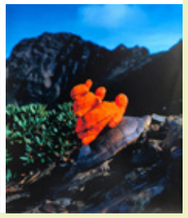
マネージャー：開発好明

Islandsは会期終了まで毎月一度、展示や作品、祖国についての話し合いを重ねながら、新作の制作を行います。会場ではその話し合いの模様のビデオを展示しながら、そのプロセスからここの旧作と新作を織り交ぜながら発表を行います。

梁 志和 /LEUNG Chi Wo｜1968年香港生まれ。香港の Para Site の共同創設者である Leung Chi Wo は、ヴェネチア、上海、光州のビエンナーレ、ニューヨークのクイーンズ美術館、サンパウロの Museu da Imagem e do Som など、主要な美術館で国際的に広く展示されている（ロンドンのテート・モダン、上海の現代美術館）。また彼の作品は、Yishu、Artforum International、Art Review、Leap、ArtAsiaPacific、New York Times などでレビューされている。

劉 時棟 /LIU Shih Tung｜1970年台湾生まれ。 国立台北芸術大学にてM.F.Aを取得。地元の文化に長い間関心を持ち、レディメイドの「収集」と「複製」が彼の代表的なスタイル。多様で実験的なクリエーションは、国内外のアート界から注目を集めている。作品は台北市立美術館、白兎コレクション、ドイツ銀行美術などに収蔵され、またアーティスト・イン・レジデンスに頻繁に招待されています。アジア文化評議会台北支部からニューヨーク アート クリエイティビティ アワードを受賞、韓国のヨンウン現代美術館のレジデンス プログラムに参加。

開 発 好 明｜観客参加型の美術作品を中心に、「Dia del Mar/By the Sea」（Moma PS1、2002）、「おたく: 人格＝空間＝都市」（第9回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展日本館、2004）、「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2006」（2006）に出品。「中2病展」（市原湖畔美術館、2016）で個展開催。また国外では、ベルリンのニューナショナルギャラリーにて「Berlin-Tokyo/Tokyo-Berlin」などに参加し、国際的に活動している。2011年にデイリリーアートを主催し東北など150ヶ所を巡回。http://www.yoshiakikaihatsu.com/



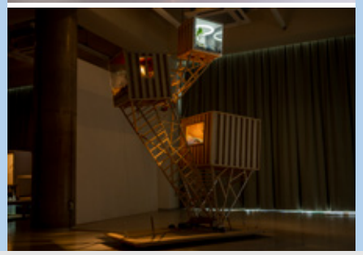
Under 35
BankART Station

宇留野 圭　マネージャー：大野高輝

「Keyway」は、部品同士をつなげる楔や接続詞のような役割を担う。また本展において、鍵の行く先という意味も併せ持つ。宇留野の作品の中で度々現れる「密室」は、鍵がかけられ、持ち去られた空間を暗示している。「さて、鍵のいく先はどこだろうか。」「密室」が一つの部品として機械の様に複雑な構造に組み込まれることで、その外側の世界を表象する。そして、世界という全体像を探し出すための心理の足跡を提示する。

宇留野 圭｜1993年岐阜県生まれ。2023年名古屋芸術大学大学院美術研究科修了。機械の構造を用いた立体作品や舞台装置の様なインスタレーション作品を制作する。「CAF賞2022」（名和晃平審査員賞、2022）、「ARTIST'S FAIR KYOTO 2023 マイナビ ART AWARD」（最優秀賞、2023）。主な展覧会に「ESCAPE」（金沢アートグミ、2021）、「DELTA」（KAYOKOYUKI、駒込倉庫、2021）

大野高輝｜1994年愛知県生まれ。2020年秋田公立美術大学大学院複合芸術研究科修了。展覧会のコーディネートや作品のインストールなどに携わる。愛知県岩倉市「Project Space hazi」ディレクター。キュレーターとしての主な展覧会に「R.E. Award」（ASP、hazi/ インドネシア、愛知、2022-2023）、「タムラに突撃!!」（hazi/ 愛知、2022-2023）、「スタートからいちばん近いゴール」（hazi/ 愛知、2022）



佐貫絢郁　マネージャー：浅見 旬

例えば胡瓜ひとつとってみても、そのかたちや歯ごたえ、風味はタイのものと日本のそれは違います。慣れ親しんだ「胡瓜」は「แตงกวา」となり、発音は「tɛŋ kwaa」だと学び、気候や文化間によって生じる日本との差分を、佐貫はじっくり味わってきました。そして、それら差分がもたらす混乱から食卓と彫刻と語学勉強とドローイングとがないまぜになり、表現を発展させました。展示においては、建築コレクティブ〈GROUP〉によって、什器や設えの視点から作品に補助線が引かれます。

佐貫絢郁｜1993年静岡生まれ。京都芸術大学大学院修士課程表現専攻ペインティング領域日本画修了。顔料を使用した絵画制作、ドローイングのほか書籍の装画をはじめ多くのアートワークを手掛ける。2022年よりポーラ美術振興財団在外研修員としてタイ・バンコクに滞在。

浅見 旬｜1993年兵庫生まれ。編集者、ライター。大学卒業後、編集プロダクションでの勤務を経て、2023年より独立。デザインスタジオ〈well〉所属。古物らの店〈Goods〉ディレクター。作家と協働したアートブックの制作・出版のほか、展覧会図録の編集、プロジェクトマネジメントなど行う。

Photo: Yurika Kono

凡人（ボンドマン）/ 光岡幸一・根本祐杜・平山 匠　マネージャー：李 静文

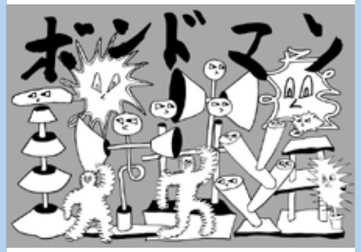
それぞれ独立した表現を模索してきたアーティスト3人によるグループ「凡人（ボンドマン）」が今夏始動する。ボンドマンは本展覧会の募集要項を平山が勘違いしたことにより、メンバーが集められた。偶然集結してしまったメンバーであるが、一期一会の精神の下、プランを考えた。メンバーたちが出した結論は、潜水艦を作るということであった。ボンドには繋げる、固まる、直すなどの意味がある。潜水艦が繋げるのはボンドマンメンバーだけでなく、潜水艦を目撃する他者にも作用する。それはまだ見ぬボンドマンである。

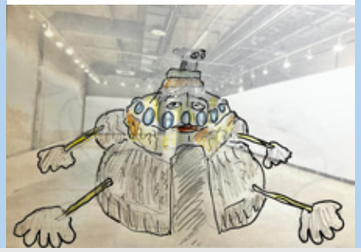
光岡幸一｜1990年生まれ。宇多田ヒカルに会う為に美大に入学。2019年東京にTAMA ART CENTERを創設。運営、企画、維持管理を行う。

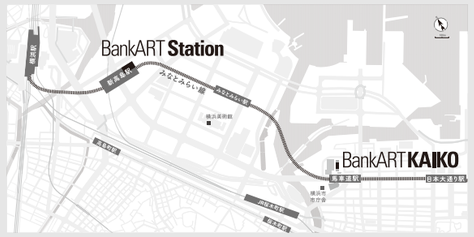
根本祐杜｜1992年生まれ。粘土を使って人や壺などを制作。東京、三ノ輪にある自宅「ソフトハウス」をアーティストランスペースとしても展開中。

平山匠｜1994年生まれ。自分と他人の違いをテーマに、空想の物語をつくり、主に陶・彫刻・テキスト・音声などで作品を制作。品川区で「コウシンキョク」というアトリエ兼、公民館的スペースを運営している。

李 静文｜2014年に来日。現在は東京藝術大学の博士後期課程に在籍して彫刻概念の研究を行う。その傍ら、芸術団体〈Upload AIR〉の運営、ウェブマガジン〈The Colossus 巨像〉の編集、アートコレクティブ〈脱衣所〉のメンバー、フリーキュレーターとしても活動。「漂流祝祭日」（横浜市民ギャラリー、2023）、「The Whole World, Watching」（脱衣所、2023）、「実在しない彫刻」（VR展、2023）。





［アクセス］
BankART Station
〒 220-0012 横浜市西区みなとみらい 5-1 みなとみらい線「新高島駅」改札上 地下 1 F
BankART KAIKO
〒 231-0003 横浜市中区北仲通 5-57-2 KITANAKA BRICK & WHITE 1F
みなとみらい線「馬車道」駅、2a 出口のエスカレーターをあがり、右手手前の赤煉瓦の建物 KITANAKA BRICK & WHITE North にお入りください。

［お問合せ］
BankART1929　info@bankart1929.com　TEL 045-663-2812